# 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 26 年 6月11日現在

機関番号: 1 4 3 0 1 研究種目: 基盤研究(B) 研究期間: 2010~2013

課題番号:22330215

研究課題名(和文)辺境における空間的・社会的移動と教育 奄美諸島の経験を基軸とした比較史的研究

研究課題名(英文) The Spatial and Social Mobility, and the Role of School for the People Living in the "Periphery": Comparative Study Focusing on the Experience of Amami Islands

#### 研究代表者

駒込 武 (Komagome, Takeshi)

京都大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号:80221977

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 6,700,000円、(間接経費) 2,010,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、近代日本において「辺境」とされた地域において空間的移動と社会的移動の可能性がどのように開かれていたのか、その中で学校教育がどのような役割を果たしたのかを解明した。具体的には、奄美諸島の経験を基軸としながら、かつて日本の「植民地」とされた台湾・朝鮮や、「内国植民地」と称された琉球諸島・北海道を含めて、これらの地域に生きる人びとが高学歴の取得を通じて脱「辺境」を志向しながらも、その試みが挫折したプロセスを分析した。また、いわば「法制化された不自由」が存続した時代に構築された資本格差が、「法制化された不自由」撤廃後の不平等を存続させるための重要な因子としての役割を果たしたことを指摘した。

研究成果の概要(英文): This research analyzes the possibility of spatial and social mobility, and the rol e of school for the people living in the "periphery" of modern Japan. Focusing on Amami Islands, along wi th Taiwan and Korea that were regarded as formal colony, and also with Ryukyu Islands and Hokkaido that we re often seen as internal colony, we have made it clear that those peoples living in these areas sought for liberating themselves from peripheral status through acquiring high academic qualification in vain. We have also pointed out that capital difference constructed through legal differentiation took an important role for maintaining inequality after the abolishment of legal differentiation.

研究分野: 社会科学

科研費の分科・細目: 教育学

キーワード: 奄美 沖縄 台湾 朝鮮 アイヌ 辺境 植民地 教育

#### 1.研究開始当初の背景

研究代表者は、戦前期日本の植民地教育に関する総合的な研究を『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、1996年)としてまとめ、その後、科学研究費(基盤研究(C) 2003年度~2005年度、研究代表者駒込武)を受けながら、植民地期台湾のキリスト教系学校との比較を含めて進めてきた。その過程において、1930年代台湾におけるキリスト教系学校排撃運動が、奄美大島におけるキリスト教系学校排撃運動と密接に連関していることを見出した。

他方、科学研究費(基盤研究(B) 2006 年度~2009 年度、研究代表者駒込武)によ る共同研究の一環として「沖縄人」意識の成 立過程を研究するプロセスで奄美諸島を訪 問し、鹿児島の「植民地」としか呼びようの ない状況が歴史的にも、現在の状況において 存在していること、さらに沖縄との関係では 奄美諸島が相対的に「辺境」としての位置を 占めるとともに、奄美諸島の内部でも奄美大 島と徳之島、さらにその西方に位置する烏島 (硫黄島島)などの間に重層的な「中心」 「辺境」構造が存在することを認識した。か つて歴史学者鹿野正直は、奄美在住の文学者 島尾敏雄の問題提起を引受ける形で『「烏島」 は入っているか』(岩波書店、1988年)とい う問題提起をしたが、単に奄美諸島を「内国 植民地」の範疇に付け加えて「日本史」の記 述に組み入れるのではなく、「植民地(主義) とは何か」という問いそのものを再考し、深 化させる必要がある、本研究計画は、この共 同研究において形成した共通認識とネット ワークを基盤としながら、奄美をめぐる問題 を軸として従来の研究成果を再検証・再編し ようとする意味を備えている。

#### 2.研究の目的

本研究の目的は、近代日本において「辺境」 とされた地域において空間的移動と社会的 移動の可能性がどのように開かれて/閉ざ されていたのか、その中で学校教育がどのよ うに地域住民の夢を担い、あるいはそれを圧 殺する役割を果たしたのかという問題を歴 史的に解明することである。具体的には、奄 美諸島の経験を基軸としながら、かつて日本 の「植民地」とされた台湾・朝鮮や、「内国 植民地」と称される琉球諸島・北海道との関 係・比較を含めて、これらの地域に生きる人 びとが移民・出稼ぎや高学歴の取得を通じて 脱「辺境」を志向しながらも、しばしばその 試みが失敗に終わり、失意の中で地域的/民 族的なアイデンティティを見出すにいたる プロセスを検討する。こうした作業を通じて 「植民地(主義)とは何か?」という問いを ステレオタイプから解き放ち、今日の世界の

根底にかかわる問いとして浮かび上がらせることを目指す。

### 3.研究の方法

本研究では、連携研究者・研究協力者を研究計画全体にかかわる「コア・グループ」と各地域単位に構成される「サブ・グループ」とに分け、「コア・グループ」のみによる会合を京都で開催する一方で、「コア・グループ」のメンバー全員が名瀬や那覇や台北を訪れて「サブ・グループ」のメンバーと討議する機会を設けた。

このような研究体制を構築するのは、地域 を越えた比較研究が実はそれほど容易では ないという認識に基づいている。フィールド を異にする研究者が一同に集まるシンポジ ウムは頻繁に開催されているが、「私のフィ です」という報告 ールドとする地域では を数多く積み重ねても、比較研究そのものは 必ずしも深まらない。限られた討論時間の中 で表層的な類似の指摘、あるいは地域ごとに 「固有」の事情があるという自明な事実を確 認するに止まりがちである。また、特定のフ ィールドを持たない個人が、日本の「辺境」 とされた地域を網羅的にカバーする研究を しようとした場合には、「東京」から鳥瞰し た視点で二次的な資料を用いて行う傾向が 強くなる。本研究の体制は、こうした事態に 対する自覚と反省に基づく模索の結果とし て定着してきたものである。

「コア・グループ」を構成するのは、台湾 史を専攻する申請者(研究代表者)のほか、 沖縄史専攻の冨山一郎(同志社大学教授)、 沖縄史研究を基盤としながら近年奄美・沖縄 関係史について新たな研究領域を開拓しつ つある鳥山淳(沖縄国際大学准教授)、アイ ヌ史専攻の小川正人(北海道立アイヌ民族文 化研究センター研究職員)、朝鮮史専攻の板 垣竜太(同志社大学准教授)の5名である。

本研究の「コア・グループ」による会議では、それぞれ異なるフィールド、研究歴、知的なネットワークを背景とする研究者が、共通の資料を読みながら、少人数でじっくりと時間をかけて議論することにより、それぞれの地域を越えて通底する経験のあり方をあぶり出す作業を重視する。特に今回の研究計画では、資料集編纂に向けて掲載する資料の確定、資料の解説執筆とその検討という作業を基軸としながら、研究会を開催した。

京都以外の地での会議は、「サブ・グループ」のメンバーを含めて開催するために参加者が増えるが、それでも 10 名程度とするとともに、やはり共通の資料を媒介としながら、じっくりと時間をかけて討議することを重視する。また、現地で資料調査をするばかりでなく、それぞれの地域の「いま」が抱える問題を凝縮した場所を訪れるなどフィールド・ワーク的な作業を行った。研究をめぐる

「土地勘」を共有すると同時に、それぞれの 地域における「いま」をめぐる問題が歴史認 識に影響を与え、歴史認識が「いま」の状況 の中で政治的働きかけとしての意味を持つ ような往還関係に自覚的であらねばならな いと考えたからである。

#### 4.研究成果

本研究計画において、「辺境」とされた地域の人びとの経験を浮き彫りにするために着眼したのは、空間的・社会的移動と教育である。これは、あらかじめ特定の地域を「(内国)植民地」として本質規定するのではない仕方で、その「辺境性」を浮かび上がらせようとするアプローチから要請される着眼である。

「植民地」の特徴は、「内地渡航制限」というような形で空間的移動を厳しく制限されると同時に、高級官僚や高級軍人、学者における植民地出身者の少なさに象徴されるように社会的な上昇移動の機会もきわめて限定されていたことである。

そのうえで本研究では、空間的・社会的移動を阻む要素が、民族間の別学制度のようにいわば「法制化された不自由」とも呼ぶべらき原理と、貧困者が上級学校に進学できないまうに「資本格差による不自由」という原理が存在することに着目し、大局的に見るない存在することに着目し、大局的に見るないではよるではったことを明らかにした。すながが、はいるないの程度除去される一方で、それまでの「領化された不自由」のもとで構築されたなりの程度除去される一方で、それまでの資料化された不自由」のもとで構築された資壁として重要な意味を持ったことを明確化した。

本研究の研究成果は、2014年度中に岩波書店より『資料 近代日本の植民主義を問う』全5巻として刊行予定である。また、研究代表者は、本研究による知見を組み込んだ単著を『世界史のなかの台湾植民地支配』としてやはり岩波書店より刊行予定であり、現在、校正中である。

なお、本研究の一環として、奄美諸島喜界島にかかわる貴重資料が北海道立アイヌ民族文化研究センターに所蔵されていることを発見、これは『奄美新聞』2012年6月9日付け記事で報道された。

## 5 . 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

### 〔雑誌論文〕(計8件)

は下線)

<u>冨山一郎</u>、伊波普猷『南島史考』をどう 読めばいいのか、奄美郷土研究会報、査 読無、第 42 号、2011、pp.139-149 <u>鳥山淳</u>、占領下沖縄の政治潮流と日本政府の援助政策、沖縄法政学会会報、査読無、No.23,2011、pp.21 25

板垣竜太、日韓会談反対運動と植民地支配責任論、趙景達他編『「韓国併合」100年を問う』岩波書店、2011、pp.246 267

板垣竜太、宮嶋史学の展開と儒教論、言語文化(同志社大学言語文化学会) 査読無、第15巻第1号、2012、pp.38 60

小川正人、「対雁学校」の歴史:北海道に 強制移住させられた樺太アイヌの教育史、 教育学研究、査読有、第80巻第3号、2013、 pp.1 13

小川正人、「第二尋常小学校」の意味:近 代北海道のアイヌ教育史における「別学」 原則の実態、教育史・比較教育論考、査 読無、第21号、2014、pp.53 85

<u>駒込武</u>、戦時同志社史再考 帝国史の観点から、キリスト教社会問題研究、第62号、2013、pp.103 134

<u>駒込武</u>、台湾総督評議会の人的構成、中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾』 2013、pp.63-94

# [学会発表](計6件)

## 가 (板垣竜太)、「

[植民地支配責任論と その系譜]」(招待講演)、主催:延世大学 大学院 BK21 アジア的政治学教育・研究事 業団&延世大学大学院 BK21 社会的包摂 と排除事業団、2010、延世大学校

小川正人、北海道幌別「愛隣学校」の歴史 キリスト教アイヌ学校と地域住民 、全国地方教育史学会第 35 回大会、2012、和洋女子大学

小川正人、近現代アイヌ史研究の現状と課題 どんな資料があるのか、資料をどうしたらいいのか 資料の現状と課題 、北海道開拓記念館歴史講座、2012、北海道開拓記念館

小川正人、「山縣良温のアイヌ教育活動」 再論:長野県小布施出身僧侶の北海道十 勝でのアイヌ教育、全国地方教育史学会 第36回大会、2013、上田女子短期大学

小川正人、「幻の建設」に込めた意志:バチェラー八重子らによる「アイヌウタリー中等教育事業」、教育史学会第57回大会、2013、福岡大学

Itagaki, Ryuta, "The Anatomy of Korea-phobia in Japan", Rethinking race/racism from Asian experiences (MAI International Seminar), Organized by Monash Asia Institute, Monash University, 2013, held at Monash University (Melbourne, Australia)

### [図書](計5件)

<u>冨山一郎</u>・森宣雄編、青弓社、現代沖縄の歴 史経験、2010、417

<u>鳥山淳</u>、勁草書房、沖縄 / 基地社会の起源と 相克 1945 - 1956、2013、275

<u>鳥山淳</u>・森宣雄編、不二出版、「島ぐるみ闘 争」はどう準備されたか、2013、274

<u>冨山一郎</u>、インパクト出版会、流着の思想 2014、375

<u>駒込武</u>、岩波書店、世界史のなかの台湾植民 地支配、2014 (印刷中) 864

# 〔産業財産権〕 出願状況(計 件)

名称: 発明者:

権利者: 種類: 番号:

出願年月日: 国内外の別:

取得状況(計件)

名称: 発明者: 権利者:

種類: 番号:

取得年月日: 国内外の別:

〔その他〕 ホームページ等

### 6. 研究組織

(1)研究代表者

駒込 武 (KOMAGOME, Takeshi) 京都大学・大学院教育学研究科・教授 研究者番号:80221977

## (2)研究分担者

( )

研究者番号:

### (3)連携研究者

富山一郎 (TOMIYAMA, Ichiro)同志社大学・グローバルスタディーズ研究科・教授

研究者番号:50192662

板垣 竜太(ITAGAKI Ryuta) 同志社大学・社会学部・准教授

研究者番号:60361549

鳥山 敦 (TORIYAMA, Atsushi) 沖縄国際大学・総合文化学部・准教授

研究者番号:60444907